William Makepeace Thackeray の *The Virginians* の一研究

畠　中　康　男

岡山理科大学工学部応用化学

(1998年10月5日　受理)

序　論

William Makepeace Thackeray (1811-63) が1857年5月に執筆を始めた *The Virginians* は，1857年11月から1859年9月までの24ヶ月間にわたって月刊誌として分冊で刊行された。単行本としては1858年と59年にロンドンの Bradbury & Evans 社から2巻本で出版された[1]。

この作品は *The History of Henry Esmond* (1852) の後日譚であり，アメリカのヴァージニアへ移住し，キャスルウッド大農園を築いた Henry Esmond の孫で，双生児の George Esmond Warrington[2] と Henry Esmond Warrington[3] とを主人公とし，その異なる性格のゆえにイギリスで対照的な人生を送り，アメリカ独立戦争でイギリスとアメリカの双方に別れて戦うという物語である。

The Virginians は連載発表中から評判が芳しくなかった。Thackeray 自身も執筆中から物語が陳腐で，新鮮さに欠け，物語進行が緩慢で失敗作であると認めていたようである[4]。特に，アメリカ独立戦争で兄弟が相別れて戦うという劇的で運命的な背景を持ちながら，実際はイギリス上流社会の享楽的な生活に染まってゆく Harry と，イギリス文壇で貧しい文筆生活に苦労する George の物語りが大半で，独立戦争の場面は最後の数章にしかすぎない。しかも，George と Harry が実際に戦争で対立して戦う物語も僅かしか描かれていない。

この点で，*The Virginians* は Charles Dickens の *A Tale of Two Cities* (1859) に比べて，物語の劇的盛り上がりに欠けていた。Dickens はその作品でフランス革命時代の動乱のパリとロンドンを舞台にして，愛する女性のために彼女の夫の身代わりになって断頭台の露と消えるという，感傷的ながら感動的な物語を巧みに描いている。*A Tale of Two Cities* と *The Virginians* はフランス革命とアメリカ独立戦争という大きな歴史的事件を背景にした小説で，ほぼ同じ時期に著されたと考えられるのだが，その後の両作品の評価には大きな違いがある。その原因はいずれにあったのだろうか。

本小論では，*The Virginians* の18世紀後半のイギリスとアメリカを舞台に，George と Harry の対照的な兄弟の波瀾に富む青年時代の物語と，彼らをめぐる人間関係，特に母と子の相克の関係などによって構築された物語と性格描写を分析・検討し，イギリス上流社会の保守的な秩序や，享楽的な生活と，それに対して一般市民社会の中に Thackeray が模索した新しく健全な人生観，価値観などについて論述したい。

第1章 *The Virginians* の物語構成について

1．*The Virginians* の構想

Thackeray が *The Virginians* を執筆する際に抱いていた作品の構想は，Gordon N. Ray が記しているように[5]，George と Harry の双生児の兄弟がアメリカ独立戦争でイギリス軍とアメリカ軍とに別れて戦うという劇的な事件と，兄弟が一人の娘を愛するということの愛の苦悩を描くことであった。Thackeray は6年前に *The History of Henry Esmond* (1852) を書いたときからこの構想を心に抱いていたようで，友人に手紙で伝えていた。

しかし，作品は全編で92章からなるが，その大半は，享楽的な生活をするイギリス上流社会において，競馬やカード賭博などに没頭した Harry の放蕩な生活と，George の貧困に耐えながら堅実な生活の闘いを中心に，彼らをめぐって繰り広げられる人間関係と，そこに織りなす愛と憎しみや，欲望と誘惑などの物語である。アメリカ独立戦争が勃発し，George と Harry が戦争に巻き込まれてゆくのは84章になってからであり，激しい戦闘の中で，兄弟が対立して戦うのは91章になってから語られる。

イギリスへ行った Harry は Eugene Castlewood 卿の姉の Maria Esmond を愛して婚約するが，Maria は彼が放蕩な生活を続けることに嫌気が差し，Harry も彼女への愛が冷めて，二人は婚約を破棄する。また，Harry は Beatrix Bernstein 男爵夫人の供をしてタンブリッジ・ウエルズ (Tunbridge Wells) へ行ったとき，彼が落馬して Lambert 大佐の家族に介抱されるが，その娘 Hetty が Harry に思いを寄せる。しかし，彼は彼女がわがままなことを知って，彼女を愛することはなかった。Harry はヴァージニアに帰って Fanny Mountain と結婚する。

これに対して，ロンドンで生活していた George に，母の Rachel Esmond 夫人[7]は Lydia Van den Bosch と結婚することを願うが，彼は Theo Lambert と親しくなって結婚する。このように，作者が当初の構想で考えた George と Harry の兄弟が同一の女性を愛することはなかった。したがって，*The Virginians* は分冊連載発表される過程で，当初の作者の構想とはかなり変わった作品になった。

2．物語の背景

物語の主要な舞台はアメリカ・ヴァージニアの植民地社会から始まる。それは George と Harry の母 Rachel Esmond 夫人が夫の死後，広大な土地を相続し，奴隷を使ってタバコや穀物を栽培する大農園を独力で経営していたアメリカ・プランテーションの世界であった。イギリスの古い伝統と秩序に束縛された世界に比べ，アメリカは新しい世界ではあったが，ヴァージニア植民地の大土地を所有し，植民地の政治，経済を支配する大農園主たちは祖国イギリスに忠実で，イギリスと同じ秩序と慣習を守って生活していた。アメリカ合衆国の独立前のヴァージニアほど貴族的な世界はなく，George も Harry もイギリス国王に忠実で，イギリスの制度を完全に守るように養育されたことが次のように語られている。

> Ere the establishment of Independence, there was no more aristocratic country in the world than Virginia; so the Virginians, whose history we have to narrate, were bred to have the fullest respect for the institutions of home, and the rightful king had two more faithful little subjects than the young twins of Castlewood[8].

しかし，ヴァージニア大農園を舞台とする物語は，George と Harry の幼年時代から青年時代までを描いた12章までにすぎない。George の戦死の知らせの後に Harry がイギリスへ渡る14章から，放蕩なイギリス生活に行き詰まり，傷心のうちに軍隊に入ってイギリスを離れる61章までの物語の舞台はヴァージニアから，イギリスのキャスルウッドやタンブリッジ・ウエルズ，ロンドンなどの貴族社会へと移る。George が捕虜収容所を脱走して無事にイギリスに姿を現わした48章以後も，二人に係わる物語の舞台はロンドンの貴族社会となる。

イギリス貴族社会は名誉や体裁，地位や財産などを尊重する世俗的な世界であった。イギリスに来た Harry が大きな財産を相続することになっているという噂に，彼の周囲の人々が彼に追従することを，叔母の Bernstein 男爵夫人は次のように語って忠告することからもよく理解される。

> "You are making your entry into the world, and the gold key will open most of its doors to you. To be thought rich is as good as to be rich. You need not spend much money. People will say that you hoard it, and your reputation for avarice will do you good rather than harm. You'll see how the mothers will smile upon you, and the daughters will curtsey! Don't look surprised! ..." [9]

この作品の背景はアメリカ・ヴァージニアの植民地世界と，イギリス貴族社会とであったが，それは必ずしもイギリスの保守的な秩序と伝統的な慣習の旧世界と，アメリカの自由と平等を求める新世界との対照的設定にはなっていない。

3．史実の傍証

この作品は，*Edinburgh Review* も指摘しているように[10]，歴史小説というより，歴史の枠組の中で，史実を活用して物語を構成しながら，主題は18世紀後半の物質的繁栄の中で，精神的活性を失ったイギリス貴族社会の秩序，道徳，慣習の中に生きる青年を描写することにあった虚構の物語であるといえよう。

物語中には，国王，貴族，聖職者，文筆家など実在した社会的著名人が数多く言及されている。例えば，1760年のイギリス国王 George IIの逝去と，George IIIの即位を初め，イギリス歴史の時代を画する事実や，アメリカ独立運動の原因の一つとなった1765年の印紙条例の制定や，1776年７月４日の13植民地による独立宣言の採択など，アメリカ合衆国の独立にいたる主要な事件が言及されている。特に，アメリカ独立宣言が発表された状況や，その自由と平等，主権在民の理念を次のように述べているのは注目される。

When we were away on our South Carolina expedition, the famous Fourth of July had taken place, and we and the thirteen United States were parted for ever. My own native state of Virginia had also distinguished itself by announcing that all men are equally free; that all power is vested in the people, who have an inalienable right to alter, reform, or abolish their form of government at pleasure, and that the idea of an hereditary first magistrate is unnatural and absurd! [11)]

また，実在した文筆家について言及している個所も少なくない。当時，批評家として著名であった Samuel Johnson は，ロンドンのコーヒー・ハウスに集まる文学者サークルの重鎮として登場する。劇作に励んでいた George が作品の批評を求めたところ，Johnson は居眠りをしていたため何も答えられなかったと，次のように揶揄して描かれているところもある。

When Mr. Warrington has finished reading his tragedy, he turns round to Mr. Johnson, modestly, and asks, —

"What say you, sir? Is there any chance for me?"

But the opinion of this most eminent critic is scarce to be given, for Mr. Johnson had been asleep for some time, and frankly owned that he had lost the latter part of the play. [12)]

その他，スコットランドの政治家であった John Home (1722-1808) が1756年に悲劇 "Douglas" を発表して成功したこと，*Pamela* や *Clarissa* の作者 Samuel Richardson が1761年に死去したことなど，実在人物の動静が記されている。

このように，史実を時代背景に巧みに取り入れて，18世紀後半のイギリスとアメリカの歴史的枠組みの中で，それぞれの社会生活と風習を描き出して，物語の背景を構成している[13)]。

第2章　登場人物と筋の構成

1．主な登場人物

The Virginians は Juliet McMasterも述べているように[14)]，事件の発展より，人間関係によって物語を構成した小説である。特に，双生児 George と Harry の対照的中心人物のそれぞれ波瀾に富んだ人生と，二人をめぐるさまざまな人物との人間関係によって，二人の興味深い人物像と，イギリス社会の実態が浮き彫りにされて行く。

Henry Esmond の主人公 Henry Esmond 大佐と Francis Castlewood の未亡人 Rachel (Castlewood) が結婚してアメリカのヴァージニアに移住し，広大な土地を買って農園を営んだ。彼らの一人娘 Rachel Esmond は George Warrington と結婚して，双生児の George と Henry (Harry) が生まれた。この兄弟が物語の中心人物である。Rachel Esmond の

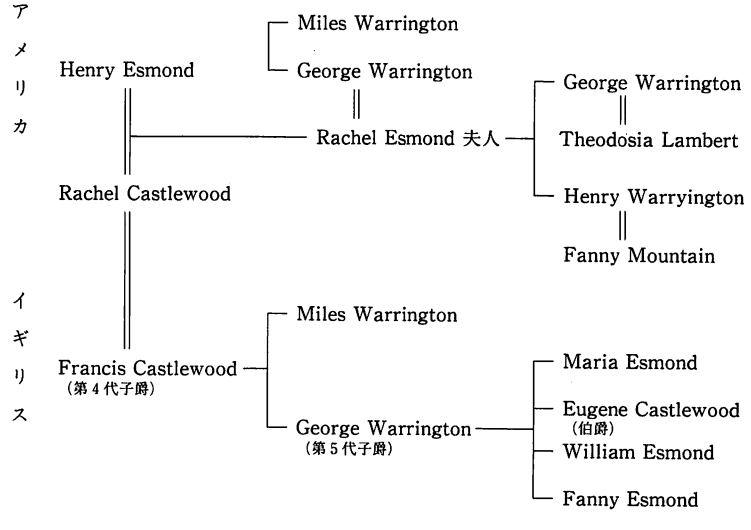
夫は早く亡くなり，彼女は遺産を相続して独りで農園を経営する。

Rachel (Castlewood) には前夫 Francis Castlewood との間に Beatrix と Francis James Castlewood の二人の子供がいた。Beatrix は *Henry Esmond* にもわがままな娘として登場していたが，彼女は Thomas Tusher 主教と結婚し，夫の死後，Bernstein 男爵と再婚したが，再び夫が亡くなり，この作品では Beatrix Bernstein 未亡人としてイギリス社交界の生活を楽しんでいた。

Francis James Castlewood も二度結婚していて，先妻との間に Maria と Eugene の二人の子供があり，Harry がイギリスへ行ったとき，Eugene が競馬やカード賭博などの遊び相手になり，Maria には Harry が思いを寄せていたことがあった。

George が准男爵の地位と財産を相続した Miles Warrington 卿は，父 George Warrington の兄で George の伯父であった。

The Virginians に登場する主要な人物をCastlewood家の家系図で示すと，次のとおりである。



2．物語の筋の構成

The Virginians の物語の梗概を主要な点のみ要約して述べると，次のとおりである。

1．George と Harry の兄弟は互いに仲がよかったが，性格は異なっていた。兄の George は温和でまじめな性質であり，誠実な青年であったが，弟の Harry は明朗で活発，率直だが楽天的な性質で，遊び好きな青年であった。

2．George はフランス軍と戦う Braddock 将軍の遠征軍に加わる。遠征軍は敗北し，George は戦死したと伝えられる（13章）。

3．Harry はイギリスへ渡り（14章），キャスルウッドに住む親戚の Castlewood 卿と

その家族を訪ねる。彼は親戚の人々に歓迎され，伯母の Bernstein 男爵夫人に特別な寵愛を受けながらも，放蕩な生活に溺れてゆく（16章）。

4．Harry は伯母の供をしてタンブリッジ・ウエルズへ行くが，途中で落馬して負傷し，Lambert 大佐とその家族の介抱を受ける（21章）。怪我が癒えた Harry はタンブリッジ・ウエルズで伯母たちと合流して，社交界の生活を楽しみ，放蕩な生活に没頭する（28章）。

5．ロンドンへ帰った Harry は賭博で金を使い果たし，負債のため逮捕される（45章）。そのとき，思いがけず George が現れて，弟の負債を弁償する（48章）。George は負傷して捕虜になっていたが，脱走してきたのであった。Harry は Kingsley 連隊に入り，旗手としてフランス海岸への遠征に加わる（65章）。

6．George はロンドンで文筆生活に専念し，彼の著した悲劇がコヴェント・ガーデンで上演され，好評を博す（68章）。彼は Theodosia Lambert と結婚する（79章）。

7．George の結婚に反対していた母 Rachel からは送金も止められ，彼の2作目の劇が失敗したため収入も途絶えて貧困に苦しむ（81章）。しかし，彼は叔父の Miles Warrington 卿の地位と財産を相続し，イギリス貴族として生きてゆくことになる（85章）。

8．失意の Harry は Wolfe 将軍のカナダ遠征軍に従軍してケベック攻略に加わるが，ヴァージニアに帰って土地を購入し，母の反対を押して Fanny Mountain と結婚する。

9．アメリカ独立戦争が勃発し，George はイギリス軍に，Harry は植民地軍につく（86章）。しかし，イギリス側にあって，生ま故郷のアメリカと戦うことに疑問を抱いていた George は，弟の軍隊と戦っていることを知ってイギリス軍を去ってイギリスに帰国する（91章）。Harry は最後まで戦い，功績をあげる。

第3章　作品の不統一性について

1．主題の不統一

The Virginians はその物語の構成が前半と後半では大きく変化し，一貫性に欠けると Herman Merivale が批判している[15]。たしかにこの作品では Harry を中心にした物語から，George を中心にした物語に変わってゆく。したがって，そこで語られる物語の主題は異なることになる。しかし，この主題の変化はどのような目的でなされたのであろうか。また，その変化にはどのような意味があるのだろうか。果たして，主題の変化が作品を不統一にしているのだろうか。この点につて検討したい。

この作品の最初の1章から13章までは，George と Harry の幼年時代の生活が語られ，ヴァージニアの植民地世界と，そのキャスルウッド大農園を支配する Rachel Esmond の農園主としての威厳と，母親としての愛情と，George の母親への反発などが中心主題であった。

それに引き続く13章から47章までは，Harry がイギリスで競馬やカード賭博に耽る放蕩

な生活が主な物語である。Harry はヴァージニアの大農園を相続するだろうという噂で人々から追従され，賭博に勝って得意な生活を送るが，やがて賭博に負けて無一文になり，負債のため留置されて，彼の放蕩な生活も破滅に至る。結局，Harry はイギリス社会に溶け込むことができなくて，イギリス社会を去ることになる。

後半の48章から85章までは，George がイギリス社会で文筆家として貧しい生活と闘いながら生きてゆく経緯が主な物語である。彼は叔父の Miles Warrington 卿の准男爵の地位と財産を相続して，結局，イギリス上流社会に同化してゆく。

このように，失意の Harry が遠征軍に加わって物語の表舞台から姿を消した後は，George のイギリスでの生活が物語の中心に描かれてゆく。物語の中心人物の変化とともに，物語の中心主題が変わっている。この点が物語の一貫性を欠いていると指摘されるところであろう。

しかし，Harry の放蕩な生活は，イギリス上流社会の人々自身の名誉や物質本位で，軽薄な人生観，価値観を露呈させる役割を十分に果たしていたと考えることができるだろうし，George の着実に努力する生活は，イギリス社会の新しい堅実な人生観と価値観をもった紳士像を描き出すことになったと考えることができるだろう。したがって，前半の Harry を中心とした物語から，後半の George を中心とする物語に不統一に変化したのではなく，イギリス社会の善意と私欲，堅実と軽薄などの明と暗の特質を対照的に描き出そうとしたものと言えよう。

2．叙述の不統一

この作品は作者自身が話し手となって物語を語る形式で始まる。ところが，73章から George が話し手に変わってゆく。この点について検討したい。

作者は作品の冒頭で話し手が想像力を十分に発揮して，過ぎ去った時代や人々を生き生きと描きたいと，次のように書いている。

> …poring over the documents, I have tried to imagine the situation of the writer, where he was, and by what persons surrounded. I have drawn the figures as I fancied they were; set down conversations as I think I might have heard them; and so, to the best of my ability, endeavoured to revivify the bygone times and people. With what success the task has been accomplished, with what profit or amusement to himself, the kind reader will please to determine[16].

物語は主に話し手の客観的叙述と，登場人物の会話によって進行してゆく。ただし，Thackeray の癖で，話し手が一人称の叙述で顔を出すことが少なくない。例えば，73章でアメリカ独立戦争について詳しいことは判らないが，アメリカが祖国イギリスに勝利したと，次のように作者が一人称叙述の形式で私見を述べているのがその例である。

> Well, then, what happened I know not on that disgraceful day of panic when

your father fled the field, nor dared to see the heroines engage; but when we returned from our shooting, the battle was over, America had revolted, and conquered the mother country[17].

81章で George とその妻 Theo との新婚生活を語るとき，話し手は十分注意して語らなければならないと，次のように語る 'I' は，明らかに作者である。

—I know that I ought to be very cautious in narrating this early part of the married life of George Warrington, Esquire, and Theodosia his wife—[18]

ところが，次の82章では George と妻の Theo とが息子を George ではなく Miles と名づけることにしたと，次の叙述のように語る話し手 'I' が George に変わり，

… and Thoe and I agreed that our child should be called after that single little friend of my paternal race[19].

84章でも，冒頭にヴァージニアでの少年時代を振り返って次のように語る話し手が George になっている。

In our early days at home, when Harry and I used to be so undutiful to our tutor, who would have thought that Mr. Esmond Warrington of Virginia would turn Bear-leader himself? [20]

小説作法において話し手が代わるということは，物語の叙述の視点が変化することで，一般には異例なことである。このような異例なことをしたのはなぜであろうか。Thackeray が無意識で行ったとは考えられない。当然，何らかの理由で話し手を代えたものと考えられる。その理由の一つは，物語がアメリカ独立戦争となり，戦争や独立の原因や実情，結果など，政治的問題の批判や評価を伴う記述を，全知の話し手である作者自身が語ることは批判を浴びかねない。それゆえ，登場人物の一人に語らせるほうが好ましいと考えたのからではないだろうか。イギリス人作家であった Thackeray が自ら意見として述べるより，イギリスの立場で観察して叙述する George の話し手に変えることにしたのであろう。

第4章 *The Virginians* の人間関係について

1．George と Harry の性格描写につて

George と Harry は双生児の兄弟ながら，彼らの性格は異なり，二人はそれぞれ異なる人生を歩んで，最後にはアメリカ独立戦争で互いに敵対する立場に戦うことになる。

George は寛大で温和，誠実な性格である。彼は幼い頃は勉強好きだが内気で気難しい少年であったことが，次のように述べられている。

George was a demure studious boy, and his senses seemed to brighten up in the library, where his brother was so gloomy. He knew the books before he could well nigh carry them, and read in them long before he could understand them[21].

それに対して，Harry は明るく，活発な性格であった。彼が幼い頃から黒人の少年相手にボクシングしたり，狩りや魚釣りなど野外での遊びに興味を持っていたことを，次のように描いている。

> Harry, on the other hand, was all alive in the tables or in the wood, eager for all parties of hunting and fishing, and promised to be a good sportsman from a very early age[22].

George と Harry の性格の相違は，彼らの生まれ育った環境によるものであろう。ヴァージニアの大農園は，イギリス社会と同じように，兄弟の序列が厳格で，長子が地位，財産の相続権を有することによって家族の秩序を維持する慣習があった。したがって，George と Harry は双生児で，生まれ出てきたのは一時間程しか違わなかったが，George が家長となる特権が与えられていた。彼らの祖父が亡くなったとき，Rachel Esmond 夫人は兄の George が地位，財産を相続し，弟の Harry は常に兄に敬意を払わなければならないと，次のように語っているごとく，アメリカ植民地の大農園は保守的な社会であった。

> When the boys' grandfather died, their mother, in great state, proclaimed her eldest son George her successor and heir of the estate; and Harry, George's younger brother by half an hour, was always enjoined to respect his senior[23].

2．対照的人生の叙述について

イギリスでの George と Harry の生活も対照的であった。Geoffrey Tillotson は Harry が若くて容姿に優れ，人柄もよく活発な青年で，理想的男性に描き上げようとしたと考えられると述べているが，どうであろうか[24]。Harry は若くて資産があり，容姿も優れ，陽気で，快活で，交遊好きで，気前のよい青年であったので，上流社会の人々に好まれ，歓迎された。その様子は次のように描かれている。

> Harry was liked because he was rich, handsome, jovial, well-born, well-bred, brave; because, with jolly topers, he liked a jolly song and a bottle; because, with gentlemen sportsmen, he loved any game that was a-foot or a-horseback; ...[25]

さらに，Harry は女性には謙虚で，内気な表情を示すのでかえって，女性の関心を引き，身分の低い人々には気前がよく，また，困らせないように気配りをしていた様子も次のように描かれている。

> because, with ladies, he had a modest blushing timidity which rendered the lad interesting; because, to those humbler than himself in degree he was always magnificently liberal, and anxious to spare annoyance[26].

Harry は楽天的で，負債を払えぬために拘留されたとき，彼は過去の放蕩な生活を後悔しながら，彼を助けてくれる友達が20人もいると思っていた。しかし，彼を助けてくれる人は誰一人いなかったことが次のように描かれている。

Remorse for past misdeeds and follies Harry sincerely felt, when he found himself a prisoner in that dismal lock-up house, and wrath and annoyance at the idea of being subjected to the indignity of arrest; but the present unpleasantly he felt sure could only be momentary. He had twenty friends who would release him from his confinement: to which of them should he apply, was the question[27].

George はしだいにロンドンの政界や法曹界の人々の知己を得た。彼はまた劇場に通ったり，文人，演劇関係者の集まるコーヒー・ハウスへ出入りした。彼は読書を好み，静かな生活を愛してロンドンに定住し，文筆生活に専念する。母からの送金で，出費のかさむ生活を続けていたが，賭博や競馬などには興味を持たなかった。彼をとりまく環境が彼の行動に影響を与えたものと，次のように語られている。

He was not wild or extravagant like his brother. There was no talk of gambling or race-horses against Mr. George; his table was liberal, his equipages handsome, his purse always full, the estate to which he was heir was known to be immense. I mention these circumstance because they may probably have influenced the conduct both of George and his friends in that very matter concerning which, as I have said, he and his mother had been just corresponding[28].

George が Theo と結婚したことに母は立腹し，彼女からの送金が打ち切られたことと，第二作の悲劇が失敗に終わったために収入が途絶えて，彼は貧しい生活に追いやられた。その不運な時期に彼は友人に励まされた喜びを次のように記されている。Harry が苦境にあるとき，彼の友人が誰も助けてくれなかったのと対照的な違いである。

Thus, the part of my life which ought to have been most melancholy was in truth made pleasant by many friends, happy circumstances, and strokes of lucky forty[29].

3．アメリカ独立戦争をめぐる兄弟の立場

こうして，George と Harry は異なる人生を歩み，結局，アメリカ独立戦争において兄弟が敵味方に別れて戦うことになる。George がイギリス側についたのは，Miles Warrington 卿の財産を相続してイギリスの領主となり，イギリス市民になっていたためであると，次のように述べている。

Now my country is England, not America or Virginia: and I take, or rather took, the English side of the dispute. My sympathies had always been with home, where I was now a squire and citizen: but had my lot been to plant tobacco, and live on the banks of James River or Potomac, no doubt my opinions had been altered[30].

それに対して，Harry がアメリカ側につくが，それは彼の妻の Fanny の影響によって彼が反イギリスの意見を抱くようになり，その結果，彼はしだいにイギリスに抵抗する立場に傾いていったためであった。その事情は次のように描かれている。

> His wife, all agreed (and not without good reason, perhaps), had led him to adopt these extreme anti-British opinions which he had of late declared; and he was infatuated by his attachment to the gentleman of Mount Vernon, it was farther said, whose opinions my brother always followed, and who, day by day, was committing himself farther in the dreadful and desperate course of resistance[31].

イギリス軍に加わっていた George は，生まれ故郷のアメリカを攻撃することに疑問を抱いた。彼はアメリカが全ての人に自由と平等を約束した新しい世界であったことと，君主制度の愚かなことを考えると，人には自ら好む政治形態を選ぶ権利があると，次のように述べている。

> … I was a Virginian—my godfathers had promised and vowed, in my name, that all men were equally free, (ncluding, of course, the race of poor Gumbo,) that the idea of a monarchy is absurd, and that I had the right to alter my form of government *at pleasure*[32].

アメリカを攻撃するイギリス軍の残虐な戦闘を見て，ますます戦争に懐疑的になっていた George は，彼の部隊と激しく戦ったアメリカ軍部隊の中に Harry がいたことを知って，兄弟が敵味方に分かれて戦う戦争の悲惨な宿命を痛感し，軍隊を去ってイギリスへ帰る決心をする。Harry は独立戦争が終結するまで戦って，功績をあげるのだが。

このように，物語は異なる性格の兄弟であった George と Harry が対照的な波瀾の人生を歩んだすえ，最後にイギリス軍とアメリカ軍に別れて互いに戦うという劇的な盛り上がりになるはずであった。しかし，兄弟相互の殺戮の戦闘を避けて軍隊を去って帰国するのは，戦争に懐疑的であることや，兄弟が敵味方に分かれて戦うことの悲哀などによって，戦線離脱の理由をいかに正当化しても，物語の劇的興味をそぐものであったし，この作品が不成功に終わるのもやむをえなかったといえよう。

第5章　母と子の関係について

1．Rachel Esmond夫人について

The Virginians で注目すべき主題は，Rachel Esmond 夫人とその息子たちとの親子関係，母と子の相克の問題である。Thackeray の小説における母子関係の問題は，*The History of Pendennis* に見られたが，それは主人公 Arthur Pendennis が過保護な母から自立して人生を切り開くことが主題であった。*The Virginians* における母と子の問題は，親の権威と，自己中心的な考えを息子たちに押し付ける母と，親のもとから離れて自由に人生を

生きようとる息子たちとの闘いであった。

Rachel Esmond 夫人は夫が亡くなった後，ヴァージニアのキャスルウッド農園を相続し，大勢の人や黒人奴隷を使って大農園を一人で経営していた。彼女は農園主にふさわしい強い性格と頑固な意思を持ち，絶対的な威厳と自尊心を持っていた。彼女は負けん気が強く，頑固で強情な性格の女性であったことは，次のように描かれている。

> The truth is, little Madam Esmond never came near man or woman, but she tried to domineer over them. If people obeyed, she was their very good friend; if they resisted, she fought and fought until she or they gave in[33].

Rachel Esmond 夫人は農園の使用人に対しても，家族に対しても絶対的な支配者であった。彼女は彼女自身が両親に従順であったように，子供たちにも彼女に従順であるように求めたと，次のように描かれている。それが農園をいつまでも繁栄させる方法であると考えていたからであった。

> Had she not obeyed her papa and mamma during all their lives, as a dutiful daughter should? So ought all children to obey their parents, that their days might be long in the land[34].

Rachel Esmond 夫人は，Robert A. Colby も指摘しているように[35]，福音派の Ward 司祭の影響を受けていたようで，演劇なども好ましく思わないほど厳格な考えの持ち主であり，息子たちはとても厳しく躾た。George と Harry が幼い頃，母の言うことを聞かず，しばしば言い争っていたことが次のように描かれている。

> A fierce quarrel between mother and son ensued out of this event. Her son would not be pacified. He said the punishment was a shame—a shame; that he was the master of the boy, and no one—no, not his mother—had a right to touch him; that she might order him to be corrected, and that he would suffer the punishment, as he and Harry often had, but no one should lay a hand on his boy[36].

Rachel Esmond 夫人は息子たちを従順に従わせるために厳しく養育して，保守的な家族制度と農園経営の功利的な考えを押し付けるのであった。しかも，彼女は George と Harry がいつまでも幼い子供のように思って，過保護なほどの愛情を抱き，また，母の思いのままにならせようと，息子たちに従順であることを強要した。しかし，彼らが成長してゆくにつれて，自らの意思で行動してゆき，母の思いのままにならず，親子が衝突することがしばしばであった。特に，息子たちの結婚問題になると，彼女は自らの願望を押し付けて，息子たちが自分で結婚相手を選ぶことに反対した。

2．Georgeと母の対立について

Rachel Esmond 夫人は George と Harry をヴァージニアの大農園のプリンスのように養育した。それは名誉と信義を重んじ，勇敢で行動力のある人間であった。特に長男の George

は農園主の地位と，大農園の財産を相続するものと考えて，過大な期待をもって厳格に養育した。彼女は福音派司祭の家庭教師 Ward に子供たちを厳しく教育させたが，George が彼に反抗したとき，次のように厳しく罰するように言った。

"Yes, sir, punish! If means of love and entreaty fail, as they have with your proud heart, other means must be found to bring you to obedeence. I punish you now, rebellious boy, to guard you from greater punishment hereafter. The discipline of this family must be maintained. There can be but one command in a house, and I must be the mistress of mine. You will punish this refractory boy, Mr.Ward, as we have agreed that you should do, and if there is the least resistance on his part, my overseer and servants willo lend you aid."[37)]

Rachel Esmond 夫人はいつも絶対的な権力をもって家族や農園の人々を思いどおりに支配してきた。George が Lambert 大佐の娘の Theo と婚約すると，Rachel Esmond 夫人は彼らの結婚に反対した。彼女はヴァージニアに広大な土地を購入した Van den Bosch の娘で，大きな財産を相続する Lydia と結婚することを願っていたからである。

Theo の母親 Lambert 夫人が Rachel Esmond 夫人に娘のことをよろしくと願って手紙を差し出すが，Rachel Esmond 夫人は次のように丁重だが冷淡な返事を書くのであった。

The letter was not cordial, and the writer evidently but half satisfied; but, such as it was, her consent was here formally announced[38)].

また，Rachel Esmond 夫人は淑やかだが威厳に満ちた手紙で George に彼の結婚に不承知なことを告げる。しかし，George は母に逆らって Theo との結婚を決心する。彼にとって母に対する反抗は，次のように描かれているごとく，大きな決断であった。

My letter to Madam Esmond, announcing my revolt and disobedience (perhaps I myself was a little proud of the composition of that document), I showed in a duplicate to Mr. Lambert, because I wished him to understand what my relations to my mother were, and how I was determined, whatever of threats or quarrels the future might bring, never for my own part to consider my separation from Theo as other than a forced one[39)].

George が Theo と結婚すると，Rachel Esmond 夫人は怒って彼への送金を差し止めてしまう。そのため George は家庭教師をして貧しい生活に耐えながら，母の感情的で，独裁的な力に抗して生きてゆかねばならなかった。

3．Harryと母の対立について

Rachel Esmond 夫人は長男の George を彼女の農園の後継者として厳しく養育したためにしばしば衝突した。他方，Harry は明るく，楽天的な性格であったためか，彼が次男で相続する財産が少ないことを気懸かりにしていたためか，母は彼に甘く，彼を溺愛した。例えば，彼女はイギリスから高価な馬車を買ったことを後悔して，次のように語っている。

Madam Esmond deeply regretted the expense of a fine carriage which she had had from England, and only rode in it to church groaning in spirit, and crying to the sons opposite her, "Harry, Harry! I wish I had put by the money for thee, my poor portionless child—three hundred and eighty guineas of ready money to Messieur Hatchett!"[40)]

George と Harry の兄弟はとても仲がよく，母が George を激しく叱っているとき，Harry が次のように兄をかばって母に抗議することもあった。

George looked despairingly at his mother until he could see her no more for eyes welled up with tears. "I wish you would bless me, too, O my mother!" he said, and burst into a passionate fit of weeping. Harry's arms were in a moment round his brother's neck, and he kissed George a score of times.

"Never mind, George. *I* know whether you are a good brother or not. Don't mind what she says. She don't mean it."

"I *do* mean it, child," cries the mother. "Would to heaven—"

"HOLD YOUR TONGUE, I SAY!" roars out Harry. "It's a shame to speak so to him, ma'am."[41)]

George の妻 Theo の妹 Hetty が Harry に好意を寄せていたが，このことを Rachel Esmond 夫人は快く思わず，Harry と争いが絶えなかった。しかし，Harry は Hetty がわがままな娘であることを知っていやになり，彼は Fanny Mountain を愛するようになる。彼女の母 Mountain 夫人はかつて Rachel Esmond 夫人と学校時代の友だちで，夫が亡くなったのち，娘とともにヴァージニアへ来て，Rachel Esmond 夫人の邸で家政婦として働いていたことがあった。Harry がそのような使用人の娘と結婚するなど，彼女はとうてい許せなかった。彼女が Fanny に冷淡な態度であったことを，Harry の手紙で次のように記されている。

"And yet my Fanny says she doth not regret Madam's unkindness, as without it I possibly never should have been what I am to her[42)].

また，Harry が母の気持ちに反して Fanny と結婚したことに，Rachel Esmond 夫人の怒りは治まらず，彼の暗く，打ち沈んだ気持ちであったことが，次のように描かれている。

My poor Hal was of the entertainment, but gloomy and crestfallen. His mother spoke to him, but it was as a queen to a rebellious prince, her son, who was not yet forgiven[43)].

このように，George も Harry も結婚問題では母の反対に抗して闘った。母の反対の根拠は，息子を資産家の娘と結婚させたいと願ったが，その願いが叶えられなかったことと，かつての使用人の娘という身分の違う女を勝手に結婚相手に選んだことなど，功利的な目的と，保守的な身分意識であった。George と Harry の母との闘いは，彼女の結婚観，価

値観との闘いであり，母の制約から自立して，彼らの新しい人生を切り開く闘いであった。

結　論

The Virginians の物語の背景はアメリカ・ヴァージニアの大農園社会とイギリス上流社会であったが，大半はイギリスの享楽的な上流社会生活であった。しかも，そこに描かれたヴァージニア植民地の大農園は，自由と平等の新しい理念の実現の夢を膨らませる世界ではなく，母国イギリスに忠誠を誓い，イギリスの伝統的秩序と慣習を守りながら，繁栄を求める保守的な世界であった。George と Harry が生きたイギリス社会は，18世紀後半の George 国王時代のイギリスで，Robert A. Colby も述べているように[44]，豊かな物質的繁栄を遂げ，古い社会体制の絶頂期にあったが，その中にも新しい社会の発芽が予期された。この作品の主題はイギリス旧世界とアメリカ新世界の社会秩序と風俗習慣を比較して叙述するのではなく，伝統的なイギリス上流社会の道徳と秩序の崩壊と，新しく台頭するイギリス市民社会の人生観・価値観とを対照的に描き出すことであったと考えられる。例えば，Harry が負債のために留置されたとき，彼と親しくしていた人々で誰も彼を助けてくれる人がいないという不親切な，心の冷たい社会であった。それに対して，George が貧困に困っていたとき，彼の知人，友人が助けてくれた暖かい心に感謝しているが，彼の生きていた社会はささやかながらも互いに助け合い，励まし合う，暖かい心のかよった人間の世界であった。

George の妻 Theo は明るく純心で，辛抱強く，愛情豊かな女性であり，George が不遇なとき，彼を励まし大きな支えとなった。彼女が苦しい試練に耐えて，変わらぬ愛情で彼を支えてくれたことを，George は次のように語っている。

> I look at my own wife and ask her pardon for having imposed a task so fraught with pain and danger upon one so gentle. I think of the trial she endured, and am thankful for them and for that unfailing love and constancy with which God blessed her and strengthened her to bear them all[45].

また，George は貧しい生活に耐えていたときに，友人の親切と，感謝することの喜び，貧しさの中に喜びや慰めのあることを知ることができたことを，George は次のように語っている。

> I have endured poverty, but scarcely ever found it otherwise than tolerable: had I not undergone it, I never could have known the kindness of friends, the delight of gratitude, the surprising joys and consolations which sometimes accompany the scanty meal and narrow fire, and cheer the long day's labour[46].

このように Thackeray は *The Virginians* において心温まる真実な人間関係と，誠実な人々の感謝に満ちた生活と，健全で良識のある社会を描き，真の人生観や価値観を模索す

ることに務めたのではないだろうか。

Notes

1）1852年と1855年にアメリカ旅行をした Thackeray は，アメリカ・ヴァージニアやペンシルヴァニアの植民地の歴史や，アメリカ独立戦争などの資料を収集した。*The Virginians* を書くにあたって参考にしたのは，Gordon N. Ray, *Thackeray, The Age of Wisdom 1847-1863* (ndon: Oxford University Press) によると次の諸書籍であった。

George Bancroft, *The History of the American Revolution* (1852-54年の英語版)

William Bradford Reed, *The Life of Esther de Berdt, Afterwards Esther Reed of Pennsylvania* (1853年),

Robert Beverly, *The History of Virginia*,

Chastellux, *Travels*,

Graydon, *The Memoirs of His Own Time*

また，Robert A. *Colby, Thackeray's Canvass of Humanity, An Author and His Public* (Columbus: Ohio State University, 1978), p.394は Thackeray が次の書籍を参考にしたと記している。

John Esten Cooke, *The Virginian Comedians; or, Old Days in the Old Dominion*

John Pendleton Kennedy, *Swallow Barn; or, Days in the Old Dominion.*

2）以下 George と記す.

3）以下 Harry と記す.

4）Lambert Ennis, *Thackeray: The Sentimental Cynic* (Evanston: Northwestern University Press, 1950), p. 209.

5）Gordon N. Ray, *op. cit.*, p. 382.

6）第1巻48章と第2巻44章からなるが，本論では92章の通し番号で記す.

7）Rachel Esmond Warrington は夫の死後，自らを Madam Rachel Esmond と称していたので，本論では Rachel Esmond 夫人と記す.

8）William Makepeace Thackeray, *The Virginians*, vol. I. (London: Smith, Elder, & Co., 1878), p. 27.

9）*Ibid.*, I. p. 222.

10）*Edinburgh Review* (October 1859, cx, 438-53).

11）Thackeray, *op. cit.*, II. p. 409.

12）*Ibid.*, II. p. 149.

13）Robert A. Colby, *op. cit.*, p. 399.

14）Juliet McMaster, *Thackeray, The Major Novels* (Toronto: University of Toronto Press, 1976), p. 213.

15）Herman Merivale, *Life of W. M. Thackeray* (London: Wàlter Scott, 1891), p. 194.

16）Thackeray, *op. cit.*, I. pp. 2 f.

17）*Ibid.*, II. p. 249.

18）*Ibid.*, II. p. 313.

19）*Ibid.*, II. p. 323.

20）*Ibid.*, II. p. 327.

21）*Ibid.*, I. p. 29.

22）*Ibid.*, I. p. 29.

23）*Ibid.*, I. p. 28.

24）Geoffrey Tillotson ed., *Thackeray, The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1963), p. 296.

25) Thackeray, *op.cit.*, I. p. 388.
26) *Ibid.*, I. p. 388.
27) *Ibid.*, I. p. 415.
28) *Ibid.*, II. pp. 174 f.
29) *Ibid.*, II. p. 329.
30) *Ibid.*, II. p. 370.
31) *Ibid.*, II. p. 394.
32) *Ibid.*, II. pp. 409 f.
33) *Ibid.*, I. p. 33.
34) *Ibid.*, I. p. 33.
35) Robert A.Colby, *op. cit.*, p. 404.
36) Thackeray, *op. cit.* I, p. 29.
37) *Ibid.*, I. p. 46.
38) *Ibid.*, II. p. 183.
39) *Ibid.*, II, p. 285 f.
40) *Ibid.*, I. p. 36.
41) *Ibid.*, I. p. 36.
42) *Ibid.*, II. p. 346.
43) *Ibid.*, II. p. 368.
44) Robert A.Colby, *op. cit.*, p. 400.
45) Thackeray, *op. cit.*, II. p. 313.
46) *Ibid.*, II. p. 313.

Bibliography

1) Thackeray, William Makepeace, *The Virginians*, Vol. 1 & 2, Smith, Elder, & Co., London, 1878.
2) Baker, Ernest A., *The History of the English Novel*, Vol. 7, Barnes & Noble, Inc., New York, 1968.
3) Colby, Robert A., *Thackeray's Canvass of Humanity*, Ohio State University Press, Columbus, 1979.
4) Dodd, John W., *Thackeray: A Critical Portrait*, Russell & Hussell, New York, 1963.
5) Greig, J. Y. T., *Thackeray, A Reconsideration*, Oxford University Press, London, 1950.
6) Jay, Elizabeth, *The Religion of the Heart*, Clarendon Press, Oxford, 1979.
7) McMaster, Juliet, *Thackeray, The Major Novels*, University of Toronto Press, Toronto, 1976.
8) McMaster, R. D., *Thackeray's Cultural Frame of Reference*, Macmillan, 1991.
9) Ray, Gordon N., *The Buried Life*, Oxford University Press, London, 1952.
10) …… , *Thackeray, The Age of Wisdom* 1847—1863, Oxford University Press, London, 1958.
11) Tillotson, Geoffrey & Donald Hawes ed., *Thackeray, The Critical Heritage*, Routledge & Kegan Paul, London, 1968.
12) Wheatley, James H., *Patterns in Thackeray's Fiction*, The M. I. T. Press, Cambridge, 1969.
13) Williams, Ioan M., *Thackeray*, ARCO, New York, 1969.

A Study of William Makepeace Thackeray's *The Virginians*

Yasuo HATANAKA
Department of Applied Chemistry
Faculty of Technology
Okayama University of Science
Ridaicho 1-1, Okayama 700-0005, Japan
(Received October 5, 1998)

William Makepeace Thackeray's *The Virginians* describes the adventurous lives of the twins, George and Harry, who sent their contrasting lives and finally were obliged to fight against each other in the battle of the Independence.

Their mother Rachel managed a large plantation in Virginia. She had the conservative senses of traditional order and customs of English society. She brought up their sons very rigidly and they often rebelled against her. The quarrels between the mother and her sons give an interesting topic to study in the story.

Harry was a prodigal young man. When he stayed in England, he was flattered because he was considered as an heir to a large estate in Virginia. He was absorbed in seeking pleasure and gambled away his fortune. His prodigal life shows not only his own slovenly character but also the insincere manners of the English society.

When George failed to be a writer in London, he suffered from hardships. But he was helped and encouraged by his wife Theo and his friends. He could find their warm hearts and the joys and consolations in the poor life. This shows that Thackeray put stress on the description of the faithful human relationships in the wholesome society.

The story ought to have been dramatic so far as the brothers fought against each other in the Independence War. George inherited his uncle's state and fortune in England, so he engaged himself in the King's army. But George felt it was wrong to fight against his brother as well as against his own native land. He retired from the army and returned to England. No matter how reasonably justified his retirement might be, it certainly resulted in spoiling the dramatic interest of the story.